
風姫

並木沙知子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風姫

【Nコード】

N4763G

【作者名】

並木沙知子

【あらすじ】

肺を患う主人公・若宮鈴とその元同級生・村里恭の、鈴の人生の最後の方の時間軸での話です。

a c t . i 1 0 0メートルダッシュ (前書き)

今の予定だと、死にネタもあるかもしれません。

a c t . 1 1 0 0 メートルダッシュ

「若宮さんの様態は―」

「今、 を処方しますね」

「来月からはこの治療法に変更しましょうか」

私の周りでは難しいものばかり。

私の事なのに、誰も本人なんて気にかけない。

カルテが小さな音を立てる。 また診察。

検査、診察、服薬、検査。

忙しく動く看護師さんによってまるで一日が作られてるような気がして。

バサバサバサッ

換気の為に開けてた窓から吹いた風が、病室の窓から吹いてきたから。

（もう、嫌だ）

私はきつと、ベッドから抜け出したんだと思う。

act・1 100メートルダッシュ

「はあ、…っげほ！」

幸い一階の病室にいたから、その窓からスリッパのまま逃げ出した。走るたびにパコパコと音を立てるスリッパが苛立つ。でも春の日差しが暖かくて、吹く風が寒い。これでいいかな、と近くの茂みに隠れて息を整える。

遠くから聞こえる「若宮さんどこにいるんですか!？」の聲がここまで聞こえてくる。

結構遠くまで逃げたと思ったのに、やっぱり病気は確実に自分を蝕んでいる。

茂みから少し頭を出して、走ってきた距離を頭の中で計算する。自分が得意だった短距離走と同じ距離。

「100メートル…」

1本でこんなに苦しいなんて思わなかった。

「…若宮？」

外から呼びかける声に私はとりあえず振り返った。遠くの方でまだ探す声が聞こえる。

…きつと病院の人じゃないと踏んだから。

「村里、君？」

「どうしたんだよそんなところで。」

「なんでもなっ…」

不意に息が苦しくなつて。

「げほごほげほっ」

「…大丈夫か？」

呼吸が出来ない、涙が出てきた。
落ち着かない、苦しい。

「病院行くか？…すぐそこだし。」

そう手は伸ばされる。

病院。

そんな単語を聞くとは思わなかった。

嫌だ、あんな場所。

病人を閉じ込める魔窟。

…白い中に無意識の悪意が閉じ込められてるところ。

「…っ、嫌！」

伸ばされた手を振り払った。

あつちは善意でそうしたのだと知ってる、でも私はあんな所に戻りたくない。

あんな白い部屋、嫌。

通いたかった高校の教室と違うあんな部屋なんか。

急いで立ち上がって少しでも逃げたくて本気で走る。

速さは少ししか衰えてない、でも肺が苦しい、酸素を本気で求めている。

（助けて）

「…ちょっと待てよ、若宮！」

少し走ったところでまた追いつかれる。

掴まれた腕が痛い、ついでに病院の服装のままで寒い。

「離して」

「なんでそんなに病院嫌なんだよ。」

「自由も無い、学校みたいに楽しい事も無いとこなの。毎日薬飲まされて、検査とかたまにお医者さんに呼ばれて。」

「でも病気を治す為だろ？」

「治る見込みも無いから。お医者さんだって小声で母さんに言うのが聞こえたの。」

村里君は力なく俯いて、ついでに腕の力が抜けた。

だから逃げられると言えば逃げられるけど、今の状況で逃げるのも逃げづらい雰囲気だった。

それに。

逃げられない、気がした。

act・2 風の誘い

握り締めた腕が細かった。

力を少し込めただけで簡単に折れてしまいそうで。

2年前の面影が揺らぐ。

最後に見た表情は、卒業した日の楽しそうな笑顔だったから。

あの頃よりも白い肌の若宮はただ、こっちを見て。
足掻きもせず、ただ、こっちの様子を見ていて。

全体的に言われてみれば脆くなったような気もするけれど、俺を見る視線は…強い。

それでも若宮は、近いうちに死ぬ？

act・2 風の誘い

「どうすんだよ」

「逃げる」

「どこに？」

「病院以外」

近くのベンチに座って俺の持ってたスポーツドリンクを飲むと、昔と同じ表情で言う。

少し落ち着いたように、でも口調は少し強く。

「でも行き場はないだろ」

「それでもいい」

「だったら病気で死ぬ前に餓死するぞ」

「幸せならそれでいい」

何を言っているんだろう。

こんなこと言う奴だっけ？

あの頃の若宮は、冷静で、でも友達とは年相応で。

「餓死して何が幸せだよ……」

俺たちの価値観の違いを強調するかのように一陣の風が吹く。冷たく、それでも春の風なのか不思議になる。

でも、俺より薄着の若宮は、もっと寒いのか？

そっちを見やる、けれど、若宮は表情を変えずにスポーツドリンクをまた一口飲む。

若宮はぼつり、ぼつりと話し始めた。

せっかく憧れの高校に入ったのに1ヶ月くらいで病気が発覚して高校を中退せざるを得なくなったこと。

余命が半年しかないこと。

全てがああ頃からは想像できなくて、みんなの泣いた小説の話かと思っただ。

“全て若宮の作り話”だったなあ。

そう思う俺とは対照的に、真面目な表情で話し続ける若宮。

また風が吹く。

ああこの風は俺と若宮を更に遠ざけた価値観の違いか。
埋められない溝。2年間の残酷な現実。

俺が普通に過ごした2年間と、病気で苦しみながら戦って結局負けていくと知っている若宮の。

風が吹く、風が吹く。

若宮の話の途中には何度も風が吹いていた。

真剣に聞いても、呆然とする。

話を聞けば聞くほど遠のく現実。

若宮が話し終えて、こっちを見る。

「だから私は自由になりたい。1日でもいいの。それしか要らないから。だから、…お願い、私を逃がしてよ」

若宮は本気でそう頼んでいた。

いつの間にかスポーツドリンクは空になっていた。
俺は答えに詰まる。

答えられない。

半年しか生きれなくて、このままだったら病院から一步も外に歩けないんだったら、やっぱり一度くらい、っと思う。
けど若宮がその先で死んだら、俺のせいで死んだみたいで後味が悪くて。

たった一言、言うだけだったのに。
若宮を見るのすら怖くて。

「いなくなったら皆が困るんだよ」

「……わかってる」

「じゃあそれなら大人しく帰れよ」

「……話せば逃がしてくれると思ってた。でも、無理なんだね。」

泣きそうな表情で若宮は俺を見る。

やっぱり脆くなった。気がする。

若宮の何を知っていたわけでもないけど、そんな気がする。

俺の一言で泣くなんてことは、一度も無かった。

遠くで「若宮鈴さーん！」と大人の呼ぶ声がする。

若宮がいなくなったのによりやく気付いたんだろう。

泣きそうな若宮を医者達に引き渡そうかと考えた。

でも、そのとき一陣の風が吹いた。

さっきの風よりも冷たく強い風。

若宮を見る、もう涙が一滴零れて服を濡らし始めていた。

これ以上泣く若宮を、見たくなかった。

「若宮、走れるか？」

「……っ、…走れる…」

「じゃ、走るぞ」

無茶だと思った。

若宮は肺の病気なんだから。

でも、そろそろ出てくる病院関係者を見たら、何となく若宮を引き渡したくなかった。

勝手だと思いかもしれない。

だけどそれが唯一の俺の感情。

若宮、やっとお前の言ってる事が少し分かってきたよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763g/>

風姫

2010年10月28日03時15分発行